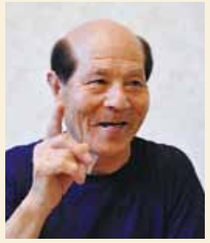
9月17日は、多年にわたり社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う「敬老の日」です。

「60年ほど前までは、毎年4月20日のデバイの日には、どこの集落も70歳以上のお年寄りを招待してお祝いをしたものです。その当時は70歳以上となると、各集落6、7人くらいのものでした。今では70歳はまだ若いくらいです」こう話すのは、枕崎市老人クラブ連合会の楠優会長です。

現在、住民基本台帳に基づいた本市人口（8月1日現在）は、年代別に見ると、70歳代が3322人、80歳代が2101人、90歳代が464人、100歳以上が11人います。また、高齢者といわれる65歳以上の本市総人口に占める割合は31・8％で、およそ3人に1人は高齢者ということになります。

楠会長は「動けるうちは自分自身で生きがいを見つけることが大切。私自身、趣味がカラオケだったこともあり、75歳になってからカラオケ店を始めたんです。人と接することが一番の元気の秘訣ですね」と話します。

豊富な経験や技術を持つ元気なお年寄りの方々の活躍は、まちの活性化に大きな役割を果たしています。


枕崎市老人クラブ連合会
楠 優会長（立神本町・88）

敬老祝金を支給

市では、敬老の日を前に、本市在住の高齢者に対し、長寿を祝福し、敬老祝金を支給しています。9月5日に80歳、87歳、90歳到達者に市職員から、また、13日には98歳到達者と100歳以上の方々に市長から敬老祝金が手渡されます。

小湊 薫さん（塩屋北町・90）
「天気のいい日の夕方は、若い人たちとゲートボールをしています」と話す小湊さん。“若い人たち„といってもみんな70歳以上の方々ですが…。そんな仲間たちと市外で行われる大会に出場することもあるそうです。「みんなでワイワイしながら楽しくやっています」と笑顔で話していました。

大園 利正さん（田布川町・78）
昨年、健康診断で直腸がんが見つかった大園さん。「今まで病院にかかったこともないくらい健康だったので驚きました。早期発見で助かりました。いつも知人には『健診はしっかり受けて』と言うんです」。手術は成功、今では毎日の農作業や庭の手入れなどで朝10時には汗びっしょりになると言います。

白澤 徹さん（白沢東町・87）
平成15年に帰郷した白澤さん。「そら豆づくりにはまってます。盆栽のようなものですね」と話します。農業経験のなかった白澤さんですが、購入した15アールの畑で妻のチヨ子さん（83）と農作業を楽しみます。ほかにもグラウンドゴルフや健康体操など、多趣味な白澤さんの話は尽きることがありませんでした。

神田 マユミさん（千代田町・73）
今年から始めたという陶芸に夢中の神田さん。「できあがりを想像しながら作るのが楽しいんです。できた器を眺めると個性があって、これが自分なのかな？って思うんです」と話します。枕崎の役に立ちたいと様々な会に参加する神田さんは「逆にパワーをもらっています」と笑顔で話していました。

第２回Ｓ-１グルメグランプリで優勝！
「枕崎鰹船人めし」を無料で振る舞います

枕崎市通り会連合会では、敬老の日を前に高齢者の方々に喜んでいただこうと「枕崎鰹船人めし」の振る舞いを1,000食限定で行います。付き添いの方にもご提供します。
●**日時**　9月15日（土）　午前11時～午後３時
●**場所**　地場産業振興センター２階和室
●**問合せ**　枕崎鰹船人めし実行委員会　TEL72-2110

【敬老の日】
９月の第３月曜日。「多年にわたり社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う」日。1966年（昭和41）「国民の祝日に関する法律」の改正により建国記念の日、体育の日とともに追加制定された国民の祝日。

わが町の人を訪ねてロマネス句

エンターテイナー“ちゃんサネ„さんが枕崎にゆかりのある人を訪ねインタビューし、ようよう一句ひねります。

PROFILE
1911年（明治44年）生、木場町。結婚して広島県呉市に転居後、終戦とともに枕崎に帰郷。35年前から日記をつけるのが日課で、白寿の記念に今までに書いた日記を一冊にまとめた「気まま日記」を作成。今も畑仕事や絵画、地域行事などを楽しむ元気な百歳。

file.6

溢れる感謝の100年

渡邉 テルさん（100）

「昔のことを、よおく覚えてますよぉ。わたしは体が弱くてね～、なんにも食べられなかったんですよ。そしたら父が毎日、知り合いのところまで牛乳を買いに行ってっぱり覚えてくれよったですがね、やたい、ありがたいと思ってねぇ・・・」テルさんの語る言葉の終りは必ずこの「ありがたい、ありがたい」で結ばれます。

11月には百と一歳を迎えようとするおばあさんの眼差しの力、いわゆる「目ぢから」に圧倒された。言葉であれ、長年の日記の文章であれ、色彩豊かな絵画であれ、驚くべきことには家の近くの菜園（はたけ）であれ、彼女の表現媒体には、この感謝の心から発せられた眼力ビームが投射されている。

「人が少なくなってねぇ、ここの道を1日に2人か3人、運動で歩いて通りますがね。まったく通らん日もありますよぉ、わたしは通る車の数をかぞえたりするんですよう」菜園で作業してしていても、傍を歩く『人』に、心が注がれている。感謝の心が向うべき対象は、やはり人びとなのである。

インタビュー中「お茶をどうぞ、まちっと入れてやらんかね」と、気遣ってくれる百歳のおばあちゃん。途中、娘婿（むこ）が現れると「まちっと、こっち移ろかい」と気遣う。すべての配慮に余念がないこのエネルギーは、分け隔てなく速やかで、私たちを瞠目（どうもく）させた。

テルさんが子どもの頃、「ほ～たてばあさん戸を開けっくれやい」という遊びがあったそうな。野草の穂を撫でながら、その合い言葉めいたまじないを呼びかける。「そんすれや、チョ～～っち、開けっくれやっわけですよ」、中からクモのような虫が現れるそうな。そう語るテルさんの笑みは4、5歳の童女のように可愛らしい。

好きな歌がありますかと問うと「枯れススキの歌が好きで、主人とよく歌いよったですよぉ」と話すテルさん。船頭小唄である。呉海軍工廠（こうしょう）で勤務していた御主人は、仕事の話を全くなさらなかったが、最近、息子さんが66年ぶりに呉市を訪ねたとき、丁重な扱いを周りからされ、それが感謝感謝と振り返る。

5人の子どものうち既に息子さんは2人他界されている。「まだ3人生きっておりますがねぇ」そう言うと明治以降の方の遺影が並んだ鴨居を見上げて手を合わす。「ほんのこて、私は幸せ者ですよぉ」。

最後に、今からさき世の中がどうなればいいですかと尋ねた。「あたしは世の中もあの世も同じようになればいいと思っているんですよ。亡くなった人も、この世の人のように同じように暮らしていられるんかしら。自分はこんなに幸せに生きていられて、ありがたい、ありがたい…、ほんとうにのさってますがよぉ」

そこにいた全員が百歳のおばあさんの世の隔絶を越えた哲学に感服致し申した。

出っきやんせえ
穂をたて婆さん
遊んもそお
（唱）ひとがいっぱい
集まっちょいなあ

上 自宅の隣にある菜園でオクラを収穫する渡邉さん。
下 渡邉さんの描いた花の絵には「3月9日、敬老会で頂いたありがとう」の文字。